

國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 金杉武司著 『哲学するってどんなこと？』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2023-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤野,寛, Fujino,Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000150

紹介

金杉武司著

『哲学するってどんなこと?』

藤野 寛

【ふまじめな紹介】

哲学の入門書には二つの存在理由がある。一つは、高校生を大学の哲学科に誘惑することだ。倫理という授業が必須科目になっっている高校は減る一方だろう。哲学（や倫理学）を学んだ経験のない高校生を誘惑しなければならぬのだ。

もう一つは、うっかり哲学科に漂着してしまった大学一年生に、哲学科とは一体、何を勉強するところなのかを説明することだ。彼（女）らには是非とも愉しい四年間を過ごしてもらいたい。誘惑するのと激励するのと、二種類の哲学入門書が必要なのであり、本書は、後者だ。

私の印象では、國學院大學哲学科に入ってくる一年生の約三分の一は、気がついたらここに漂着していた、という感じだ。このタイプの一年生には、この本はとても有り難い助けになるはずだ。（それに対して、はなから哲学を学びたくて哲学科に

入ってきた学生には、例えば同じ著者による『こころの哲学入門』（勁草書房）がおすすめです。）

【まじめな紹介】

日本語で読める良い哲学入門書が増えつつあるのは喜ばしい。本書でまた一冊増えた。類書の中にあつてこの本を特徴づけているのは「哲学には答えがない」という世間に流布するイメージを突き崩そうとする激しい情熱だ。

「はじめに」で、哲学とは「人間（人）」「心」「善悪」「時間」「幸福」「美しさ」といった「私たちの生の土台や前提となっている基本的なもののことの本質が何であるかを論理的に考えること」（一〇―一三頁）だと定義される。当然、ではそれらが「何であるか」という問いに対する答えが本書で提示されていることを期待して読んでしまうことになる。けれども「おわりに」では、「答えを求めて、他者とともに粘り強く考え、生きていくこともまた、立派な「哲学する」ことの一部です」（二三―九頁）と言われる。本書でも、実は「解答」ではなく、「追求」のプロセスが披露されていることが分かる。「そういうものだ」とカート・ヴォネガットのように言いたくなる。

（新書判、二五六頁、筑摩書房、二〇二二年七月発行、定価八八〇円＋税）